池袋東武百貨店第三回粉博

中島八十一

粉博とは粉もの博覽會の謂ひなり。すなはち粉ものの屋臺が廣き催事場を埋め盡すイベントなり。もとより關西の独擅場にて關東よりの出店賣るはうどん、中華麵にてそは粉ものにあらざるなり。

目指すはたこ焼き、大阪より二基の出店を見る。他の粉ものと呼び得るものすべて東海道新幹線新大阪驛にて贖ひ得ればここにて買ふ要なし。まづは一軒。あまりの人氣に長蛇の列をなしたれば、後方に最後尾と記したるプラカード持ちたる初老のをんなこれを仕切る。粉博三度目ともなりたれば出張費用、百貨店に納むる金子、手間差し引きても有り餘る實入り皮算用すれども敢へていづれにもこのこと語らずに大阪離れたり。改めてこの長蛇の列を眼前にすれば自づと笑ひこみ上げ止められず。粉博終了後は新宿伊勢丹に寄りハイカラな洋服、ウチ用に買ふたんねん。娘にも貸したろか。なんぼで貸したろかいな。思ひやるばかりに喜び沸き起こる。

そもたこ焼き賄ひの最大の缺點は焼くことに時のかかることにあり。長蛇の列の由はここなり。並ぶ客、三人の職人焼く様をとくと眺むることとなる。焼き方は中年をとこ二人に二十代をんな一人。ひとへに焼き續くと思ひきや、やをらをんな揚げ玉をむんずと片手掌にところせく詰め込みてコンロに凄まじき様に投げつけたり。あるは半球の焼き型あまたに揚げ玉埋み、片やたえて入らぬ半球もあり、残り大半はコンロの外に散らばりたり。殘る二人の焼き方はまたかよと思ひつつ黙々と焼き続く。去年もさありき。をんなの脳裏を和田アキ子の歌流る。♪みんな知ってたの、いつかかうなると。♪大阪を留守にすれば定めてかくなる。初めの年こそおどろかであれど今年ともなれば大阪をいづるほどよりまたをとこは逃ぐるに違ひなからむと思ひ定めし。さりとて來まほしき東京なり。ビジネスホテルの朝餉に付く納豆ばかり堪へ難しも、大阪の人、京都の人みな東京戀しきなり。♪それでも苦しい。あきらめるなんて♪一昨年もこのをんな揚げ玉投げつけたり。粉博初めてのことなれば、をとこの一人不用意にどないしたんと聲掛け、たこ焼きに油注ぐ結末になりき。今は二人のをとこ黙々と焼き続く。

やうやう余の番になりずっしりと重きあつらへの品受け取りき。顧みれば行列を仕切るをんな相變はらず笑ひの止まらぬけしきに變はりなし。一幕の寸劇觀終はりいたく飽きたる余は、いま一軒の屋臺にて行列の最後尾に付きたり。

（令和六年七月十一日受附）